

## 江戸東京博物館友の会会報

目次

データで見る友の会の構成	会員数が初めて減少	1	えど友サークルだより	7
友の会セミナー「謎の浮世絵師・写楽を追う」		2	会議・会合日誌	7
友の会セミナー「龍馬を継いた男 岩崎弥太郎」		3	「東京新百景」の入賞作品など決定	8
「古文書に親しむ特別講演会」/記念グッズのお届け		4	第2回えど友研究発表会「輪王寺宮」と「かっぽれ」	8
見学会「川面から見る江戸東京」		5	えど友プラザ「東百官」について	9
特別観覧会「隅田川～江戸が愛した風景～」		6	落語で江戸散歩…⑯ [唐茄子屋政談]	10
江戸博クリップ「最近の快事」		6	催事案内 / 会員優待のお知らせ	11～12



## 友の会の構成

## 会員数が初めて減少、平均年齢65.2歳

会員のみなさんから入会時や更新時に提供いただいている性別・年齢・住所・入会日などのデータを本年8月末で集計しましたので、その結果をお知らせします。

まず、会員数は集計を取り始めて以来初の減少となり、昨年の1,655人から47人減って1,608人となりました。

## ◎男性68.1%、女性31.7%

男女別では「男性」1,095人(68.1%)、「女性」510人(31.7%)で、およそ3人に1人が女性です。この比率はここ数年変わりません。

&lt;表1 参照&gt;

表1 〈男女別〉

2010/8月末		2009/8月末		
人数	%	人数	%	
男性	1,095	68.1	1,121	67.7
女性	510	31.7	534	32.3
不明	3	0.2		
計	1,608	100.0	1,655	100.0

## ◎60代が約4割

年代別では60代が最も多く38.4%、次いで70代27.7%、50代14.7%ですから、この三つの年代で全体の8割を占めていることにな

ります。40代、50代が昨年よりも減少し、反面、60代以上が増えたので平均年齢は昨年の64.2歳からやや上がって65.2歳になりました。

&lt;表2 参照&gt;

表2 〈年代別〉

△	2010/8月末		2009/8月末	
	人数	%	人数	%
30歳未満	8	0.5	20	1.2
30代	43	2.7	42	2.5
40代	84	5.2	103	6.2
50代	236	14.7	269	16.3
60代	617	38.4	629	38.0
70代	445	27.7	426	25.7
80歳以上	109	6.8	102	6.2
不明	66	4.1	64	3.9
計	1,608	100.0	1,655	100.0
平均年齢	65.2歳		64.2歳	

## ◎都民は減る傾向

住居地別では、「東京都」居住が63.8%で、ほぼ3人に2人が都民ということになりますが、2003年9月には71.0%でしたから都民は減少傾向にあります。埼玉、千葉、神奈川の3県の合計は昨年と変わらず30.8%です。

1都3県以外に居住の人が86人でやや増えています。<表3 参照>

## ◎最近5年間の入会者が65.4%

入会年次別にみると、最近5年間

表3 〈住居地別〉

△	2010/8月末		2009/8月末	
	人数	%	人数	%
23区内	862	53.6	908	54.9
都下	164	10.2	158	9.5
(東京都計)	1,026	63.8	1,066	64.4
埼玉県	159	9.9	155	9.4
千葉県	237	14.7	244	14.7
神奈川県	100	6.2	111	6.7
(3県計)	496	30.8	510	30.8
その他	86	5.3	79	4.8
計	1,608	100.0	1,655	100.0

表4 〈入会年次別〉

△	2010/8月末		2009/8月末	
	人数	%	人数	%
2001年入会	189	11.8	216	13.1
2002年入会	67	4.2	70	4.2
2003年入会	111	6.9	122	7.4
2004年入会	82	5.1	84	5.1
2005年入会	108	6.7	112	6.8
2006年入会	187	11.6	230	13.9
2007年入会	218	13.6	260	15.7
2008年入会	265	16.5	355	21.5
2009年入会	204	12.7	206	12.4
2010年入会	177	11.0		
計	1,608	100.0	1,655	100.0

(本年は8月末まで)に入会した人たちが全体の65.4%を占めています。

なお、2003年9月の調査では2001年入会者が291人を数えていましたので、このうちの189の方々が今日まで継続して友の会に入会されていることになります。

&lt;表4 参照&gt;

【報告】広報部会・菅沼和男

集計：事務局・堀井なつ恵

# 「謎の浮世絵師・写楽を追う」

講師 内田千鶴子さん（江戸文化研究家）



## 写楽研究はこうして始まった

最初に、NHKハイビジョンで3年前放映されたいろいろな写楽研究家の説をビデオに収めたものなかで、私の「能楽者説」15分あまりをご覧いただきました。このように写楽の研究を始めたきっかけは義父内田吐夢（本名・内田常次郎、生涯で『人生劇場』、『飢餓海峡』など71本の映画を制作した日本を代表する映画監督）の残した水木洋子氏あての写楽映画化に寄せる手紙でした。満州で写楽の作品に出会い感動、「～能も芝居も元は一つだ～」「見栄と能面の一致～」等、私はこれを読んでそのおもしろさに引き込まれ、昭和54（1979）年、写楽研究に着手しました。

昭和18（1943）年まで定説「能楽師ワキ方斎藤十郎兵衛が絵師・東洲斎写楽説」があつたのですが、その後、昭和30（1955）年～平成まで、70冊ほど写楽別説が出ました。これらにロマンをかきたてられはしますが、一度原点に立ち返り真実を追求すべきと思いました。

## 写楽の作品と謎

東洲斎写楽とは今から214年前、寛政6（1794）年5月一挙に28枚の役者大首絵で衝撃のデビューをし、翌年1月までの10カ月間に140枚を制作、江戸中をセンセーショナルな渦に巻き込みながら、突然筆をたった浮世絵師です。ではその作品の中から写楽能楽者説を探すと、役者大首絵では、「敵討乗合話」の尾上松助演ずる松下造酒之進（能面の痩せ男に重なるか）、中山富三郎演ずる娘、宮城の野は能面の若女を彷彿させる、などでしょうか。紹介した大首絵の最も特徴的なところは背景を黒雲母で描いているところです。「恋女房染分手

綱」の三代目大谷鬼次演じる「奴・江戸兵衛」や市川蝦藏の「竹村定之進」などのインパクトある構図を引き立てたのは、墨に貝粉を混ぜた黒雲母摺で、これで成功したのだと思います。

大首絵の後、二人立ち絵・全身像・追善絵・武者絵・大童山文五郎の土俵入相撲絵・恵比寿講にちなんだ「恵比寿」を次々に出しましたが、2月以降はいっさいの作品を残していないし、その生涯や正体は不明です。この謎に迫るには今ある同時代の人物の記した古文書の分析から類推するしか方法がないと思いました。

## 「写楽=斎藤十郎兵衛」の裏付け

写楽が姿を消して50年後、江戸神田雑子町の町名主でかつ江戸考証家として数々の書物を著した斎藤月岑が「増補浮世絵類考」を弘化元（1844）年に完成させました。その中に「東洲斎写楽は天明寛政年中に活躍し俗称が斎藤十郎兵衛、住所は江戸八丁堀、阿波藩お抱え能役者だ」と明快に言い切っています。その原本は現在イギリスのケンブリッジ大学に所蔵されています、私はイギリスを訪れそれを見せていただき、これは信用に値すると確信いたしました。

また東大所蔵の幕府公式能役者名簿「重修猿楽伝記」「猿楽分限帳」の中に喜多流地謡方（父）斎藤与右衛門・十郎兵衛の名前が記されていたのです。「文化人名簿」にも江戸八丁堀・地蔵橋に住む写楽斎という浮世絵師がいたとの記載があるとか、江戸城で取り行われた能「鉢の木」にワキツレとして斎藤十郎兵衛が出演していたとか、いろいろの古文書からの掘り起こしのなか、平成9年6月埼玉県越谷市の法光寺（不審火消失で築地から移転）で過去帳が見つかり、斎藤十郎兵

衛なる人物は文政3（1820）年3月7日に58歳で没し千住にて火葬・埋葬されたとありました。この過去帳が出てきたことにより確実に江戸の人だということが証明されました。地図により東洲斎写楽の名前の意味を考えたとき、住まいのある八丁堀地蔵橋は、江戸城から東にあり埋め立ての洲のあるところで「東洲斎」、描くものは役者絵、芝居と吉原は江戸最大の娯楽、楽しむ場、それを写す男「写楽」、が雅号になったのではと思われます。

## 能関係者からの聞き取り

私は写楽について5冊の本を書いておりますが、それでもなお別の形から調べをすすめていました。能役者の方からの聞き取りや、能面について追究分析するという能との関わり合いを探さなくてはならなかったのです。能面のトレードマーク・目玉は（女面）若いと四角に彫り（やさしくなる）、年老いると丸く彫ります（きつくなつてゆく）。そして、ついには金色に塗られ鬼面の目となります。大首絵の目玉の描法はここからきたように思われます。

能役者ワキ方は脇柱傍に座って、長い時間いろいろ考えます。才能ある人ならばそのような環境でも造形・印象を凝縮していくって自己を高め、ついには「自己主張をしてみたい」「自分の力を試してみたかった」そんな心境になつていったのではないかでしょうか。しかし、大きな成功の後にきたものは世の中の好みが最大のライバル歌川豊国の方へ移り、人気は下降線をたどり消えていった、——というものの、写楽研究はまだまだ謎が多く、私の生涯追い求めてゆくテーマとなりそうです。

【記録】文：広報部会・松田悠美子  
写真：同・佐藤幸彦

「龍馬伝」では、三菱の創業者として知られる土佐藩士岩崎弥太郎の視点から龍馬が描かれています。本当は弥太郎と龍馬の関係はどうだったのでしょうか。弥太郎の足跡を追いかけて、あまり知られていない土佐藩の幕末史をお話します。

### 大志を抱いて幕末の渦の中に

岩崎弥太郎は二代前に郷士株を売った地下浪人の子として天保5(1834)年土佐国安芸郡井ノ口村に生まれました。14、15歳で藩主に漢詩を献じたり、史書を講じたり、土佐の地方のエリートとして勉学に励んでいました。嘉永7(1854)年21歳で江戸に向かい、安積良斎の塾で学びました。しかしながら、父の殴打事件で帰郷を余儀なくされ、事件で奉行所を誹謗したとして入牢し、故郷を追放、苗字帯刀剥奪になりました。神田村に転居した弥太郎は漢学塾を開いています。この塾には、近藤長次郎(亀山社中)も学んでいます。翌安政5(1858)年土佐藩参政吉田東洋門下となりました。海外事情調査を命ぜられ、弥太郎は安政6(1859)年26歳で長崎に赴任しましたが仕事がうまくいかず、翌年、公金横領で辞職願を提出し、無断で長崎から帰国し、免職・譴責処分を受けました。

謹慎中の文久元(1861)年に郷士株を買い戻し、翌年結婚をしました。弥太郎は郷士(正式な土佐藩士)という身分と家庭を持ち、また世に出ようといろいろなことに挑戦していました。尊皇攘夷の嵐が吹き荒れる中、土佐も武市半平太ひきいる土佐勤皇党が力を持ち、文久2(1862)年4月に師の吉田東洋が暗殺されたこともあってか、藩主の上京に加わりましたが、不始末により大坂から帰国を命ぜられました。文久3(1863)年8月18日の政変で尊皇攘夷派が力を失い、土佐も公武合体派(旧吉田東洋派)後藤象二郎たちが力を持ち、弥太郎も慶応元(1865)年三郡の下役に任命されました。

### 経済官僚として坂本龍馬を支える

慶応2(1866)年土佐藩の富国強兵をめざす開成館が開設され、弥太郎は

## 「龍馬を継いだ男 岩崎弥太郎」

講師

安藤優一郎さん(歴史家・文学博士)

第97回 江戸東京博物館友の会セミナー

(2010/9/25)



開成館貿易局下役に任命されました。この年長州征伐で幕府が敗れたことにより土佐藩の方針も変わり、慶応3(1867)年1月長崎において坂本龍馬と土佐藩参政後藤象二郎の会見で両者が提携することに決まりました。2月には開成館長崎出張所(土佐商会)が業務開始し、3月に弥太郎が長崎に赴任、4月に亀山社中が海援隊に改組されました。弥太郎は土佐商会の主任として土佐藩の出先機関の貿易業務を担当し、武士というより商人の活動をしました。弥太郎は土佐藩が中央政局に乗り出していく上で軍事力の後ろ盾がないと主張も通らない状況の中、土佐藩の軍備増強のため、土佐の物産(樟腦など)を輸出し、代金後払いとはいえ最新式の武器を買って土佐、京へ送り込むという後方支援の役を果たしていました。坂本龍馬(33歳)との交流は、弥太郎(34歳)の日記にはお酒を酌み交わしたり、お互いに語り合ったりしたことが書いてあります。海援隊のいっぽは丸沈没事件のときにも頻繁に会議が開かれ坂本龍馬や後藤象二郎とも連携しながら問題解決に動いていたようです。大政奉還路線を進

めるため6月坂本龍馬と後藤象二郎が上方に向かう時にも送別の宴を開き、涙とともに見送っています。10月15日の大政奉還の後、弥太郎も後藤象二郎との打ち合わせのため京都に入っています。残念ながら坂本龍馬は福井に行つて留守で会えず、弥太郎はそのまま大坂に移動して11月15日の坂本龍馬の暗殺の日を迎えていました。ここ部分の日記が未公開でその時の弥太郎の気持や行動がわからないためいろいろ憶測されているようです。土佐藩としては大政奉還の最大の功労者(坂本龍馬や中岡慎太郎は失ったけれど)として以後の新政府の主導権を握ろうと動いたようです。長崎に帰つてすぐ身分が上士に昇格したのをみても弥太郎の役割に期待していたようです。

### 明治維新を生き抜く、三菱誕生

慶応4(1868)年1月3日からの鳥羽伏見の戦いで幕府が負けた情報により長崎奉行河津祐邦は1月14日に長崎から逃亡したので、諸藩の代表が集まり長崎の管理にあたりました。弥太郎は土佐の代表として薩摩の代表松方正義、佐賀の代表大隈重信などとここにあたり付き合いが始まったようです。明治2(1869)年長崎の土佐商会が廃止となり、弥太郎も大阪に異動となりました。6月17日に版籍奉還が行われ藩の財産が国に移管することになり、土佐藩も移管を防ぎ民間に財産を移すため、明治3(1870)年九十九商会を誕生させ、その管理を弥太郎が担当しました。これに伴い、土佐藩少参事まで出世しています。その後、三井系の会社や渋沢栄一が作った共同運輸会社と三菱蒸気船会社の営業合戦で死闘を展開している最中、弥太郎は明治18(1885)年2月7日52歳で湯島の岩崎邸で亡くなりました。

東京での弥太郎は庭が大変好きだということで明治になって荒廃していた六義園、清澄庭園を買っています。そのことが江戸の大名文化の保存に役に立ったようです。

【記録】文：広報部会・佐藤美代子  
写真：同・佐藤幸彦

# 「古文書に親しむ特別講演会」

友の会創立10周年記念事業の第1弾として、「古文書に親しむ特別講演会」が8月18日(水)、35度を超える猛暑の中200名を超す会員が参加して行われました。この講演会では古文書に関連してお二人の講師にお話をいただきました。

最初は友の会と江戸博の共同事業として現在行われている「文政町方書上翻刻プロジェクト」で学術面のご指導をいただいている江戸博の高山慶子専門研究員による『江戸の歴史と町方書上』でした。

次に友の会の古文書講座開設当初から講師を務めていた小宮山敏和さんによる『江戸城の危機管理』でした。



▲大野晴美さん

高山さんのお話に先立って、友の会翻刻プロジェクトの大野晴美さんから「町方書上」とはなんぞ

やという解説がありました。

翻刻作業の進め方や、最終的にはすべての地域の町方書上を統一された書式で翻刻、編集して江戸博の図書館の棚に並べ、さらにはインターネットで公開して全国、全世界の人々に見てもらいたいというお話で、江戸博にとっても、友の会にとっても大変意義のある大きなプロジェクトであることが再確認されました。

## 『江戸の歴史と町方書上』

講師：高山慶子さん

(江戸東京博物館 専門研究員)

町方書上は幕府の指示の下に町の由来や現況などを名主達に報告させた調査書で、18世紀中頃には1600余町ともなった江戸の町々のさまざまな歴



▲高山慶子講師

史を伝える貴重な資料です。

幕府が主体になって、報告すべき項目なども定められて

いたのですが、各町によって、個的な記述もなされ、報告の内容はまちまちなところもあったようです。しかも、神田、日本橋、京橋など江戸の中心地ともいえる町の記述がないのが残念です。

膨大な資料である町方書上はこれまでにもさまざまに研究されてきており、地域ごとのデータ収集をしたものや、一定の分野に限って中身を追求するなど、これまで発表された文献を取り上げての解説がありました。

この講演を聞いて翻刻プロジェクトに参加してみたいと思われた会員の方もいらっしゃるのではないでしょうか。

## 『江戸城の危機管理』 — 将軍不在時の江戸・江戸城

講師：小宮山敏和さん

(国立公文書館勤務)



▲小宮山敏和講師

おととし小宮山先生が担当された古文書講座中級とりあげた資料に基づき、

将軍が日光参拝などに出かけているときの江戸の様子や将軍不在時の江戸城がそもそもどうなっているのか、また、出かけるときの警備態勢はどうなるのかなどが掘り下げられた形で解説されました。

日光社参や、上洛など長期間江戸を離れるときは軍の移動を伴うなど、平

當時ではわからない幕府組織の軍隊としての本質や、江戸城の防衛、江戸市中の警備の強化などが、残された資料から解明されています。

またこれらの資料から、将軍綱吉の頃を境に、譜代大名の立場に変化が見られるなど、古文書を読む楽しさにいっそう拍車がかかるようなお話をでした。

【記録】文：広報部会・中村貞子

写真：同・福島信一

## 江戸東京博物館友の会 創立10周年記念事業 第2弾 記念グッズのお届け

友の会創立10周年記念事業の第2弾として、記念グッズ(江戸風模様のオリジナルバッグと風呂敷)を8月18日発送で、全会員にお届けしました。

これに対して、催事申込用はがきにお札を書いてくださった方もあり、ごていねいにお札状をくださった方までありました。

また、事業部会ではさっそく見学会でみなさんに配る資料を入れる袋として各担当者がこれを利用しました。

どうぞ、これから皆さんの活動のお供にご活用ください。



# 「川面から見る江戸東京」 (船でめぐる小名木川、日本橋川、神田川)

## 双子のスカイツリーに歓声

9月4日(土)、神田川和泉橋船着場に、連日の猛暑のなか集合、午前に6艘、午後に5艘が出され、計290名が参加しました。手の届きそうな低い橋もくぐるため、屋根のない20~30人乗りのディーゼル船でした。江戸情緒豊かな浴衣姿の男女お二人(神田川船の会の方)がガイドでした。

午前の部は和泉橋を下流へ出発し、美倉橋、左衛門橋から浅草橋、柳橋までの神田川沿いに川船が係留された船宿が並び、柳橋をくぐると左手に約440メートルまで伸びているというスカイツリーが見えてきました。左折して隅田川を上り、総武線鉄橋をくぐると右側に東京水辺ラインの「両国発着場」が見え、岸壁の“テラスギャラリー”的隅田の花火や橋の絵の奥に国技館、江戸博がそびえていました。青い駒形橋、雷門をイメージした赤い吾妻橋などをくぐりました。橋げた両側に書いてある橋の名は、下流側が漢字、上流側がひらがなだそうです。アサヒビールビルの壁面に映るモザイク状のスカイツリーと本物がまるで双子のように両方間近に見えたときは船上から歓声があがりました。言問橋の手前で船はUターンし、隅田川を下り、芭蕉史跡庭園の銅像の芭蕉がおだやかに川面を見下ろすところを左折して、萬年橋から小名木川へと進んで行きました。両岸桜並木そして松並木の間を高橋から東深川橋と進み、パナマ運河方式



▲アサヒビール本社に映ったスカイツリー

の扇橋閘門でまず水位が下がって通過、小名木川橋でUターンし、今度は約1.8メートル水位が上がるのを待つこと10分、水門をくぐるとき水が垂れてきました。小名木川一帯はかつて製粉・セメントなどの工場地帯であったのが、マンション等の住宅街に変わって下水道も整備され、川がきれいになってきたそうです。

## 日本経済の中心地を行く日本橋川

隅田川に戻り清洲橋、隅田川大橋から永代橋の手前で右折して、豊海橋で日本橋川に入って行きました。湊橋は江戸時代、千石船からの荷が運び込まれたそうです。高速道路の真下を進み、ありがたい日よけとなって涼むことができました。経済の中心地あたり・茅



▲扇町閘門で水位の高低を体験

場橋、鎧橋を行き、東京証券取引所が総代という兜神社を横目に、長い薄暗いトンネル状の江戸橋をくぐると、あの江戸東京のシンボル日本橋でした。東京の未来を見え繁栄を願うキリンの像が莊厳を感じさせ、高い裏天井は幾何学模様の近代的なデザインでした。西河岸橋のあと、コンクリート造りの常盤橋、石橋の常磐橋、鉄橋の新常盤橋と並び、JR山手・中央線鉄橋の橋げた中央には船上からしか見られない、“年七正大”と刻印された旧国鉄の紋章のレリーフが付いていました。鎌倉橋から宝田橋までの左岸は家康の天下普請の際61大名に造らせたという石垣で、過去何度か崩れその度に組



▲お茶の水の聖橋。ちょうど駅に電車が…

み替え、各藩の模様入りの石が入り混じって組まれていました。靖国通りに架かる姐橋、江戸初期に埋められ明治になって掘られたという南堀留橋、堀留橋、桜並木の続く新川橋、新三崎橋、JR中央・総武線鉄橋を過ぎ、沼地の岬だった場所に架けられた三崎橋を右折して、出発と逆方向から神田川に入りました。

## 船から見る仙台濠、聖橋

左岸のビルの合間に後楽園遊園地が望まれる後楽橋、上水掛樋跡碑や水害防止の分水路の見える水道橋、ここからお茶の水橋間は伊達藩造営で仙台濠と呼ばれ、都会の秘境ともいえる緑深い渓谷でした。ガイドさんは「学生時代、中央線から眺めた橋をいつか下(船上)から見てみたいと思っていましたが、50年後その夢がかない、船の会でガイドをしています」とうれしそうでした。湯島聖堂・ニコライ堂を結ぶ聖橋、神田川橋梁、昌平橋、万世橋をくぐり、JR秋葉原駅を左に見て神田ふれあい橋を過ぎ、和泉橋発着場に上流から戻ってきました。

なお、午後の部は潮位の関係で閘門体験は1号艇のみ、その代り隅田川を白鬚橋までたっぷり楽しみました。

東京は江戸時代から政治・経済の中心として水運も発達し、川は縦横につながっていることを実感した今回の川めぐりは、また橋の博覧会場めぐりでもありました。

【記録】文：広報部会 内匠屋京子  
写真：同 中村貞子

友の会創立10周年記念事業 第4弾  
友の会特別観覧会(2010/9/24)

## 特別展「隅田川 ～江戸が愛した風景～」



9月22日(水)から11月14日(日)まで開催の特別展「隅田川～江戸が愛した風景～」の特別観覧会が、友の会創立10周年記念事業の第4弾として9月24日(金)に行われました。

まず企画担当の我妻直美学芸員から、今回の特別展に対する江戸博の熱い思いが語られ、各章の展示作品の見どころを解説していただきました。私たちになじみ深い「隅田川」を描いた絵画だけを一堂に集め、しかも8割近くは江戸博の館蔵品で、特に錦絵はすべて館蔵品でまかなわれているということです。

会場は、江戸時代前期の屏風絵からはじまり、両国橋を中心とした世俗的な賑わいを活写した江戸中期のものから近代の作品まで、160点余りが展示されています。

隅田川を描いた絵を考える上で重要なのは飛鳥時代の浅草寺「縁起」、平安時代の『伊勢物語』第九段「東下り」と15世紀頃に定着した「梅若伝説」の存在です。「縁起」には本尊聖観音像は推古天皇36(628)年に宮戸川(隅田川)で漁をしていた漁師の網にかかったとあります。江戸時代初期にはこれらにかかる場所を、隅田川とともに描いたものが多く見られます。江戸が都市として発展するにつれ、隅田川周辺に多くの遊興施設や名所が誕生すると絵画の対象もさまざまに展開されますが、これらのエピソードは江戸時代を通していろいろなかたちで描き続けられており、江戸の人々の深い愛着が感じられます。

今回は有名な作家の名品展ということではなく、発展した江戸の庶民の生活を切り口としたテーマで展示されています。隅田川を船で上る船遊びを主題としたもの、隅田川から見るのびやかな風景や橋を中心に描いたもの、そして四季折々の川涼みや花火などの風

物詩を描いたものと、隅田川と江戸の人々とのかかわりの深さがよく伝わってきます。

なかでも目を引くのは、今回の展覧会のポスターに使われ、大河ドラマ「龍馬伝」のタイトルバックにも出てくる「東都両国ばし夏景色」。極端に川を歪曲させた大胆な構図で両国の花火の風景を描いています。両国の花火はなんといっても、題材として多く扱われていますが、橋の上にひしめく群衆と水面が見えないほどに川を埋め尽くす船など、どの絵も江戸の人々のバイアリティーが画面からあふれ出んばかりで圧倒されます。

ちょっとかわったものとしては、「影からくり絵」がみられます。これは周囲を暗くして背後から光を当てるとき花火や船の提灯、岸辺の家などが明るく光って見えるという仕掛けです。江戸名所を紹介する出版物も展示されているのであわせてお楽しみいただけます。

また、絵の鑑賞とあわせて図録に掲載されている竹内館長の論文「江戸市民と隅田川」を読むと、隅田川の歴史と江戸の人々とのかかわりがさらによくわかりますよ。

【取材】文：広報部会・中村貞子  
写真：同・佐藤幸彦

## 「最近の快事」

依頼された原稿に何を書こうか悩み、内容や構成に見当をつけないまま取り敢えずタイトルだけをつけて、ワープロを開く。「最近の快事」——。仕事に、家事に、そして少しばかり研究に、目がまわりそうな日々をおくっていると、「最近身の回りでおきた痛快な出来事は?」と問われても、はたと困ってしまう。そこに至り漸く潤いのない日々をおくっていることに気づかされ猛省を促された。年を取ると日々の喜びと悲しみの振幅が次第に縮まるというが、どうやら自分にも確実に老いがおとづれているのか。そんな時、突然思いついたのは、ひいき 肩の中日ドラゴンズ往年のエース山本昌投手のこと。

往年のといつてもいまだ現役で、満45歳を迎えた今年9月4日の巨人戦

学芸員 市川 寛明

で、完封の最年長記録を打ち立てたばかり。舌を出しながら投げるのが彼の癖で、いかにも不器用なスローイングスタイルともいいまってとても超一流投手の風格はない。

記録によると山本昌が中日にドラフト指名された1983年のドラフト1位は、藤王康晴。高校時代の藤王の活躍は今でも鮮明に記憶しているが、鳴り物入りで入団した藤王のピークは高校生の時であった。藤王とまさに正反対の人生を歩むことになったのが山本昌であった。入団当時の球速はせいぜい130kmで、解説者になったばかりの生え抜きOB星野仙一が失望したという逸話が残る。下積み時代に留学したアメリカで「彼はサイドスローにかかるか運転手になるかを選択しなけれ

ばならない」と言われたというから、そんな投手が記録に残る名選手となるとは人生本当にわからない。甲子園とは無縁、当時無名で、将来社会科の先生になりたいと思っていた山本少年の才能を見出したスカウトの眼力はただなものではない。もちろん偶然かもしれないが……。

偶然のなかでチャンスをつかみながら着実にステップアップを遂げた山本昌。そんな山本昌の打ち立てた大記録に快哉を叫ばずにはいられない気持ちを抱いたのは確かなのだが、そんな気持ちすらあつというまに日常の中に消えて、快事探しに悩み、冒頭のような苦境に陥った次第。記して自戒としたい。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

## ◎活動概況

◆落語と講談を楽しむ会：8月31日(火)月番は田中文彬さんと寺島玄さんで「志ん生三昧Part II」と銘打った企画。まず寺島さんの解説で古今亭志ん生の落語「義眼」を聞き、次に田中さんの用意した志ん生一族3人の「付き馬」(古今亭志ん朝のビデオ、金原亭馬生と志ん生の音声テープ)を鑑賞した。途中「付き馬」の客がたどつた道について寺島さんの解説もあり、鑑賞後は全員で感想などを話し合った。参加者16名。9月28日(火)月番の伊東敏男さんの案内で「東京スカイツリー周辺の落語散策」。落語「文七元結」などゆかりの吾妻橋から、「野ざらし」などゆかりの三囲神社、業平の都税事務所近くの「志ん生のナメクジ長屋跡」、「中村仲蔵」で有名な柳島妙見山法性寺などに寄り、十間橋まで落語散歩を楽しんだ。参加者14名。

◆藩史研究会：8月13日(金)土屋獻一郎さんが関東届指の名藩・古河藩について研究発表を行った。11家二十八代278年におよぶ藩主・藩政の歴史をていねいに説明され、日光社参の際の供応の大変さや古河藩領地の広がりなど大変興味をそられた。参加者は23名。9月10日(金)国定美津子さんが備中国足守藩に関し、「備中国絵図」、「足守歴代藩主」、「足守荘絵図」など多くの資料を使い、詳細な研究発表を行った。足守は発表者ご本人の実父の出身地であり、力のこもった解説があった。参加者は27名。

◆古文書で『八丈実記』を読む会：8月27日(金)、9月9日(木)、9月24日(金)に例会を開催。参加者は各10、

9、10名。

◆神田川を歩き楽しむ会：8月26日(木)、29日(日)に第10回として、東京メトロ「中野新橋」駅から新橋へ出て万亀橋まで神田川に沿って歩いた。途中、中野長者の寺・成願寺、第六天堂、高歩院、神田川の歌碑、鎧神社などに寄り参拝・見学を行った。参加者は各33、25名。9月26日(日)、30日(木)に第11回として、JR「東中野」駅から万亀橋へ出て高田橋(高田馬場分水路出口・妙正寺川合流点)まで神田川に沿って歩いた。途中、観音寺(吉川英治の筆塚)、せせらぎの里、戸塚地域センターなどに寄り見学を行った。これで神田川と妙正寺川(暗渠)との合流点に達したので、以後妙正寺池から妙正寺川を下る予定。参加者は各26、40名。

◆『江戸名所図会』輪読会：8月16日(月)小林弘明さんの担当で、田安台から浅草橋を読み、みんなで話合った。参加者は15名。9月20日(月)杉村義三郎さんの担当で両国橋、杉森稻荷社、歌舞伎芝居小屋、吉原町旧地について読み、活発な討議を行った。参加者は19名。



●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

## ◆役員会

8月12日(木)17時開催。10周年記念事業の各計画、特に8月実施の古文書フェスティバル、記念グッズの進行状況報告および確認をした。出席者11名。

9月9日(木)17時開催。10周年記念事業各計画の進行状況の報告、9月実施の神田川巡りは猛暑のなか無事に終了。出席者11名。

## ◆事業部会

8月5日(木)17時開催。7・8月の事業報告、および今後の事業計画を決定。研究発表会の結果、10周年記念事業の進捗状況の報告等をした。出席者18名。

9月2日(木)17時開催。8・9月の

## 会議・会合日誌

2010/8~2010/9

事業報告、および今後の事業計画を決定。古文書講演会の報告、見学会の最終確認等を行った。出席者14名。

## ◆広報部会

8月20日(金)14時開催。「会員が選ぶ東京新百景」の進捗状況の確認、『えど友』58号担当、今後の編集ルールについて話し合った。出席者12名。

9月17日(金)14時開催。「会員が選ぶ東京新百景」の審査・展示作業のスケジュール・担当を確認。『えど友』58号の進行の確認をした。出席者10

名。

## ◆総務部会

8月18日(水)13時開催。『えど友』57号の発送業務を行った。10周年記念事業記念グッズも同封。出席者16名(他に関連行事チラシ同封のため人権啓発センターから応援4名)。

9月29日(水)13時開催。次号の日程確認、記念事業の報告、写真展担当の確認等を行った。出席者16名。

## ◆文政町方書上翻刻 プロジェクト

8月19日(木)、9月2日(木)、16日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各10名、10名、10名、(B)各8名、10名、10名。

# 「東京新百景」の入賞作品など決定 金賞に 笹川道央さん！ 両国駅構内での「写真展」にぜひお出かけを

「会員が選ぶ東京新百景」に多数の作品をお寄せいただきありがとうございました。

まず、寄せられた全559点の作品を“いつまでも残しておきたい風景、風物詩”、および“写真を見た人が訪ねたくなる場所、景観”という募集コンセプトの下、広報部会・小委員会メンバーが作品をできるだけ審査に残したいという観点で選別、7点のみを審査対象外とし、552点を第一次審査の対象としました。

第一次審査は9月24日、25日の2日間、合計63名の審査委員によって一人10点を選んでいただく方法で



▲第一次審査風景

行われました。552点もの写真が第1、2学習室の床を埋めつくした光景はまさに壯觀で、審査委員のみなさんもじっくりとご覧になっていました。開票の結果100点が入選作品として選ばれました。

第二次審査は4日後の29日、江戸博都市歴史研究室長小澤弘教授をはじめとする江戸博関係者4名と友の会の役員5名、および(写真展会場となる)両国駅長の計10名によって行なわれました。入選作品100点のうち、得票数の多かった上位24点を対象に厳正な審査の結果、下記の入賞作品10点が選ばれました。入賞者の皆さんおめでとうございます。

(敬称略)

金賞 笹川道央 「東京国際フォーラムとのぞみ号」  
銀賞 奈良井一之助 「神田川河口」  
銀賞 柴田孝 「平成版浮世絵の出店」  
銀賞 阿久津幹俊 「寛永年間に小堀

遠州作で築庭された?伝法院」

銅賞 安西淳 「両国新名所(2つのイベント館)」

銅賞 岩橋護 「永代橋とリバーシティ21」

銅賞 村松斉 「疾走」

銅賞 天野哲夫 「矢切の渡し」

銅賞 林義之 「王子の狐の行列」

両国駅長賞 村松斉 「石畳(神楽坂)」

入賞・入選作品全100点については、次のとおり「会員が選ぶ東京新百景」写真展で展示しますので、ぜひお立ち寄りください。

会期: 11月2日(火)~7日(日)

開催時間: 10:00~18:00

(最終日は15:00まで)

会場: JR「両国駅」構内

(3番線連絡通路)

なお、入賞作品およびその他の入選者・作品については、この号と同送の『図録』に全部収載していますので、ご覧ください。

## 第2回「えど友研究発表会」(2010/8/5)

### 会員2氏が研究成果を発表、「輪王寺宮」と「かっぽれ」

昨年に続き第2回の会員による研究発表会が8月5日(木)に行われました。「江戸東京の歴史と文化に関するもの」というテーマに応募した会員の中から、今回は2人が研究の成果を発表しました。

#### 1. 大渡眞司さん:

##### 「輪王寺宮の歴史」

上野公園・国立博物館の隣に「輪王寺宮」の歴代墓所がありその一部を拝観しました。墓所には、初代の後水尾

天皇第3子「守澄法親王」から、明治天皇の叔父になる十三代「公現親王」まで歴代の輪王寺宮の墓があります。

初代・守澄法親王が関東の宮門跡として江戸に下り、初代輪王寺宮となり、上野寛永寺と日光輪王寺の門跡を兼ね、比叡山を含め天台座主として全国の天台宗寺院を統括しました。三山管領家と呼ばれ、強大な權

威を持ち、徳川家ともつながりができました。

輪王寺宮法親王とは、親王宣下を受けた皇族男子から出家した者で、初代・守澄法親王以来関東に在住しました。皇族として「輪王寺門跡」もしくは「輪王寺宮」と称しました。輪王寺宮の設置は、徳川幕府と朝廷との融和が目的です。三山管領の権威を幕府は利用して、将来幕府への敵対勢力が京都の天皇を擁して倒幕運動を起こした場合、幕府は朝敵とされるのを防ぐた



▲大渡眞司さん

# えど友プリヂュ

～友の会会員の投稿欄～

## 「東百官」について

小林 弘明

先般、『えど友』(53号)の座談会に出席させていただき、江戸博の石山専門研究員より『守貞謨稿』について興味深いお話を伺い、その折岩波文庫から『近世風俗史(守貞謨稿)』として販売されていることを知られ、遅まきながら購入、時々拾い読みをしております。

その《<卷之一>の官制のこと》の箇所に

今世、『東百官』と云う物あり。俗伝には、相馬將門の制する所と云へり。これ妄説なるべし。左膳・右膳・一学・伊織・頼母等数種あり。これは天正・慶長以後のことなり。云々とあり、かねがね、武士の名乗りに、喜内・数馬等々といったものがあり意味がわからなかつたが、これ等は『東百官』というもで(平將門が新皇を称して新政権樹立を図った際に設けた官職体系であるという伝説もある)、関東における官職風の人名であることから東百官、武家百官とも言わ

れ、江戸時代において広く称されたことが分かった。当時の学者は「由緒正しからず、名乗るべからず」と評しているが、武士の間では有力武家、名門の子弟までもが称することが多かつた。

ちなみに、赤穂浪士四十七士関係でみると、小野寺十<sup>じゅう</sup>左衛門<sup>さざなみ</sup>がおり、吉良方では家老の松原多<sup>た</sup>仲<sup>ちゆう</sup>、清水一<sup>いちがく</sup>学<sup>がく</sup>等がそれに該當する。

一般的に、武士は百官に由來する○○兵衛、○○衛門、○○介・輔・丞や○○郎のように通称名を名字の次、実名(諱)の前に入れ正式の名乗りとした。

最上級の武士である大名、旗本(一定の役職についた場合)は、格式として《従五位下○○》以上の正規の位階つきの官職を通称名とするが、それ以外の武士は原則として使用できないので、上級武士は玄蕃・木工・采女や信濃・安芸のように官名・受領名だけを役職名を略して用いることが多い。

赤穂関係でみれば、浅野大学・大石主税・奥野将監・千坂兵部・吉良左兵衛等が名乗っているが、それぞれ立場に相応しい格調のある通称名であり、中級以下の武士は用いない。

『武鑑』(文政8(1825)年)記載の旗本(交代寄合、高家を含む)とその家臣から『東百官』の使用例を探してみると、多<sup>た</sup>宮<sup>みや</sup>・左<sup>さ</sup>膳<sup>ぜん</sup>・極<sup>きの</sup>人<sup>ひと</sup>・志津

馬<sup>ま</sup>・多<sup>た</sup>仲<sup>ちゆう</sup>・右<sup>う</sup>仲<sup>ちゆう</sup>・小<sup>こ</sup>源<sup>げん</sup>太<sup>た</sup>・伊<sup>い</sup>織<sup>おり</sup>・左門<sup>さ</sup>門<sup>もん</sup>・田<sup>た</sup>宮<sup>みや</sup>・主<sup>しゅ</sup>令<sup>れい</sup>・弥<sup>や</sup>藤<sup>とう</sup>太<sup>た</sup>・左<sup>さ</sup>仲<sup>ちゆう</sup>・平<sup>ひ</sup>馬<sup>ま</sup>・頼<sup>た</sup>母<sup>め</sup>・か<sup>か</sup>な<sup>め</sup>・や<sup>や</sup>も<sup>ん</sup>・べ<sup>べ</sup>い<sup>い</sup>ない<sup>い</sup>・数<sup>す</sup>馬<sup>ま</sup>・求<sup>も</sup>馬<sup>ま</sup>・多<sup>た</sup>膳<sup>ぜん</sup>……がみられる。

陪臣ではどうであろうか。『武鑑』(文政12(1829)年)で代表的大藩たる

鹿児島・島津家の家臣名をあたれば、久馬・主礼・殿衛・勇馬・東馬・矢柄がみられ、また分家の佐土原・島津家には波門・清記がみられる。

仙台・伊達家では、兵馬・丹下が、また、中規模藩の忍・松平家では相馬・織衛が、小藩の生実・森川家の項には平馬が記されている。

このように、『武鑑』記載の幕臣、陪臣とともに普遍的に用いており、『東百官』は朝廷の官職を模倣した擬似官名で、歴史的な根拠のない創作の一見官職風の名乗りであるが、官職名に憧憬する心理に強く訴えるものがあり、前述の略官職名とともに武士に好まれ、明治以後も一部用いられたものもあった。小説の世界では『丹下左膳』『むつり右門』等々で主人公として作家が採用し活躍させている。

兵馬・左源太・志津馬等々はいかにも颯爽(さっそう)とした若い武士に相応しい名前だ。

なお、環・中・亘・貢・糺・昇・央等々も『武鑑』に記されているが、『東百官』に含まれるものか否か、教示を

めに、皇統を関東に置く戦略でした。  
しかししながら、最後の輪王寺宮となる十三代公現法親王(明治天皇の叔父、還俗して北白川宮能久親王)は、戊辰戦争では薩長同盟に対抗した幕府側の奥羽越列藩同盟から「東武皇帝」として担ぎ出され、これは「自分たちは朝敵ではない」という大義(朝廷間の内部抗争)として読み取れるのです。

エピソードとして「上野彰義隊の悲劇・義觀」が紹介されました。公現親王と苦楽をともにしながら、復権して栄誉ある人生を送った親王に引き換え義觀は賊僧の汚名を着せられ、不運な選択を迫られ自殺したとの説もあり、二人の数奇な人生の物語です。

### 2. 鈴木正文さん：

#### 「江戸の踊り かっぽれ踊り 伝承を探る」

かっぽれ踊りの発祥は、大阪・住吉大社で現在も御田植神事とされている「住吉踊」といわれています。庶民が自由に地方への神社詣ができる江戸時代に、自由に往来できるお坊さんに願いごとを託し(願人坊主という)、家の前で芸を披露して心付けをもらうという、願人の踊りが源流です。

近年では、かっぽれ踊りの祖と称される初代・櫻川びん助は「かっぽれ」を看板の名称にしていましたが、正式の名称は「住吉踊」です。

かっぽれに関する歴史や由来、地域による踊りの違いなどを映像を使って説明、最後に、かっぽれ踊りの実演が披露されました。

なお、鈴木さんは、イタリアの国立大学で観光経済学科を卒業、駐日イタリア政府観光局に35年間奉職された後、日本かっぽれ協会を創立、その理事兼事務局長ということで、ユニークな経歴と芸歴!に感嘆しました。

【記録】文・写真：広報部会・秋尾暢宏



▲鈴木正文さん

## [唐茄子屋政談]



スカイツリーも見える吾妻橋

若旦那の徳さん、遊びが過ぎて意見されますが“米の飯とお天道様はついて回らア”と家を飛び出し、勘当されてしまいます。最初は良かったのですが、その内誰にも相手にされなくなります。絶望した徳さんは吾妻橋から身を投げようとしますが、偶然通りかかった叔父さんに止められます。馬鹿な甥に小言をいいながらも、長屋に連れて帰ります。漸はここから始まります。

## 本所達磨横丁

叔父さんの長屋は、本所達磨横丁にありました。達磨横丁といえば、「文七元結」の左官の長兵衛さんもこの住人です。大川（隅田川）の廻橋を都心から本所方向に渡って左手の一帯が、達磨横丁と呼ばれたところです。この横丁がこう呼ばれたのにはさまざまな説がありますが、正式な地名ではなかったので、切絵図にはこの名称は見あたりません。切絵図で御暁河岸之渡の北側に“北本所表町”“南本所馬場町、または馬場町”と書かれた辺りを達磨横丁と呼んだようです。現在の墨田区東駒形1丁目、本所1丁目の清洲通り東側で、駒形橋と廻橋間の東側となります。ですが、この辺りにこれといっ



駒形橋東詰からの東京スカイツリー

て見物するところもありません。吾妻橋を目指して歩き始めます。

## 浅草広小路

翌朝、叔父さんに起こされ、今日から「唐茄子」を売り歩けといわれます。

「(がっかり顔で) へえ、てんびん担いで唐茄子を往来へ行って売るんですか。叔父さん、(情けなそうに) それはよしてください、勘弁してくださいよ。まだ遊び時分の女だっていますよ。あいつあんな身装<sup>みなり</sup>で唐茄子を売ってやがらあ、といったらきまりが悪いですよ。いい若い者が……」

「(にらみながら) 何がいい若えもんだ、いやならよせ、俺が頼んでやつてもらうんじゃねえ、よせ。(声を張り) その代わり家へはおかねえから出て行け」

「おいてください」

「いいから出て行け」

「(あわてて) やります、やります」



▲東本願寺 この裏手が誓願寺長屋

働いたことなどない徳さんは重い天秤を担いでただ歩くだけです。吾妻橋を渡って浅草広小路へ出たころには、真昼の日に照り付けられてふらふら、日陰に倒れこんでべそをかいていると、気のいい若い衆が出てきて、通りがかりの顔見知りに声をかけて、二つ残してあの唐茄子を売ってくれます。

荷がすっかり軽くなった徳さん、売り声の練習をと考え人のいない所を歩こうと、浅草寺の裏側(北側)の通り(今の言問通り)に出ます。徳さんはこの道を歩きながら、道楽三昧の日々を過ごした吉原を追想します。いまは田んぼの面影もなくビルが密集しています。言問通りを西に向って歩きます。

せいがん じなが や  
誓願寺長屋

すると西浅草3丁目の交差点に出ま



▲浅草寺二天門 徳さんもこの前を歩いたはずです

す。ここを左折し、国際通りを南に歩くと、雷門通りとの交差点に出ます。ここから西側の東本願寺までの辺りが、誓願寺長屋とされるところです。

ここで徳さんは、浪人の女房に唐茄子を求められます。おまけをした代りに弁当を使わしてもらおうすると、浪人の子供が出てきて『もう二日も食べてない』。これを聞いた徳さんは、弁当もその日の売上もみなやってしまい、逃げるよう立ち去ります。が、せっかく恵んだ金は、入れ違いにやつて来た因業な家主に店賃にと取り上げられてしまいます。女房は徳さんに申し訳ないと首をくくり長屋は大きさぎ。一方、叔父さんは帰ってきた徳さんの話を信用せず、一緒に誓願寺長屋に駆けつけてみるとこの有様、怒った徳さんは、家主をぼかりと殴りつけてこれまた大騒ぎ。その筋のお方がご出張、そしてお調べとなります。女房は発見が早く助かり、大家はきついおとがめ、徳さんは人助けをしたとして、青差し十貫匁の褒美をもらい、勘当が許されます。“情けは人の為ならず、唐茄子屋政談の一席でした”となつて、漸は終わります。

この漸の登場人物は口では厳しいことをいいながら、道楽者の甥の性根をたたき直そうとする叔父さん、広小路で唐茄子を売りさばいてくれた気の良い若い衆。また、弁当やらその日の売上げをすっとあげてしまう人の良い徳さんなど、人情味溢れる人たちばかりです。ですが、今回の散歩では、この様な人たちを垣間見るような場所は皆無です。幕府開闢以来、普請と作事を繰返すこの街のこと、「仕方ないか」。

【取材】歩いた人(文・写真)：

広報部会・岡田守弘

イラストを描いた人：同・松原良

# 催事案内

## 古文書講座

### 各編とも来年1月から第3期を開講

各期ごとに改めてお申込みいただくことになっておりますのでご注意ください。自動継続はありません。

#### ◆入門編 講師：小松賢司さん（学習院大学大学院史学専攻）

- ・開催日：1/12(水)、2/2日(水)、3/2(水)
- ・時間：A講座は10:30～12:30  
P講座は14:00～16:00

（注意）A講座かP講座かの希望を明記

#### ◆初級編 講師：田中潤さん（学習院大学大学院史学専攻）

- ・開催日：1/19(水)、2/16(水)、3/16(水)
- ・時間：A講座は10:30～12:30  
P講座は14:00～16:00

（注意）A講座かP講座かの希望を明記

#### ◆中級編 講師：長坂良宏さん（学習院大学大学院史学専攻）

- ・開催日：1/15(土) [※]、2/19(土)、3/19(土)
- ・時間：A講座は10:30～12:30  
P講座は14:00～16:00

[※] ただし、1/15(土)はA、P合同とし、当日の10時～12時に実施とします。

（注意）A講座かP講座かの希望を明記

- ・会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1,2
- ・定員：各講座とも80人（会員のみ）
- ・参加費：各講座とも全3回1,500円（初回一括払い）
- ・申込締切：各講座とも11月30日（火）必着

#### ◆第2期の残日程

入門編 11/10(水)、初級編 11/17(水)、中級編 11/6(土)  
【企画担当責任者】上田太一（事業部会）

## 友の会特別観覧会

### ● 2011年NHK大河ドラマ特別展

#### 「江～姫たちの戦国～」

◆近江国小谷城主・浅井長政と織田信長の妹・お市の方の三女、江姫。本展では、ドラマの主人公となる浅井三姉妹の末娘だった江の生涯をその姉の茶々、初とともにたどり、戦国時代を動かした信長、秀吉、家康の姿を、背後で支えた女性の視線でとらえています。三姉妹を取り巻く人々の遺品などさまざまな作品を通じて、女性たちが激動の戦国日本をいかに生きたかを紹介する特別展です。担当の齋藤慎一学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- ・開催日：1月7日(金)17時～19時
- ・申込締切：12月16日(木)必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階ホール／企画展示室
- ・定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員500円・同伴者700円（当日払い）

【企画担当責任者】松原良（事業部会）

## 友の会セミナー

### 第99回「囲碁家元本因坊家文書の世界 —囲碁のルールから歴史まで」

講師 高尾善希さん（立正大学非常勤講師・文学博士）

◆囲碁というゲームの歴史について、囲碁家元本因坊家を中心にお話いただきます。囲碁は日本古来の伝統あるゲームです。現在の囲碁は、漫画「ヒカルの碁」がブームになつたり、政治家が趣味としてたしなみ、その様子がニュースになつたりするなど、何かと話題になっています。基本的なルールから家元制度の実態の話まで多角的に説明していただきます。

○講師略歴：たかお・よしき

昭和49(1974)年千葉県生まれ。立正大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程研究指導修了満期退学。文学博士。専門は江戸時代の民衆史（村落史、都市史）。実弟はプロ囲碁棋士高尾神路九段（元本因坊・名人・十段）。共著に『番付で読む江戸時代』（柏書房）、『徳川幕府と巨大都市江戸』（東京堂出版）など。

・開催日時：11月27日(土)14時～15時30分

・申込締切：11月16日(火)必着

・会場：江戸東京博物館・1階ホール

・定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）

・参加費：会員500円・同伴者600円（当日払い）

【企画担当責任者】小西幸男（事業部会）

友の会  
創立10周年  
記念事業  
第6弾！

第100回  
「江戸の政治改革」  
—將軍吉宗 VS  
尾張宗春—

友の会  
セミナー  
100回  
記念

講師 大石学さん（東京学芸大学教授）

◆江戸中期、低成長時代を迎えて、日本の国家と社会をどのように変えるのか、将軍吉宗の高負担・高福祉の「大きな政府」と、御三家筆頭尾張藩主徳川宗春の規制緩和・地方分権の「小さな政府」の政治理念・政治政策の対立についてお話しします。2人の対立が今日の日本の政治・社会に与えた影響についても、考えてみたいと思います。

○講師略歴：おおいし・まなぶ

昭和28(1953)年、東京都生まれ。東京学芸大学卒業後、同大学院修士課程修了。昭和57(1982)年、筑波大学大学院博士課程単位取得。名城大学助教授などを経て現職。日本近世史専攻、特に元禄・享保時代が専門。

NHK大河ドラマ「新選組！」「篤姫」「龍馬伝」、NHK土曜時代劇などの時代考証を担当。『時代考証の窓から—篤姫とその世界—』（東京堂出版2009）など著書多数。

・開催日時：12月25日(土)14時～15時30分

・申込締切：12月14日(火)必着

・会場：江戸東京博物館・1階ホール

・定員：300名 同伴者可（はがきに氏名連記）

・参加費：会員、同伴者とも無料（10周年記念事業のため）

【企画担当責任者】清水昌絵（事業部会）

## 見学会

### 「再訪 江戸城周辺の探訪—その2(内濠)」

◆江戸城周辺の再探訪シリーズの2回目です。強大な幕府体制がつくりだした近世日本最大の城郭である江戸城。その江戸城内郭(本丸、西の丸、吹上など)を取り巻く内濠は敵の侵入をくいとめる巨大な要塞であり、満々とたえた水に映る高く築かれた石垣と松の緑との調和された姿は他に比類がない美しい日本の美です。今回はその内濠を一周しながら、周辺に残る遺跡・遺構を探訪し、天下人の居城であった江戸城の壮大さと歴史をしのびます。所要時間は約3時間半、竹橋または九段下で解散となります。

●開催日：11月28日(日)12時45分集合

集まり次第、時間前でも順次出発します。

●集合場所：東京メトロ東西線・半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下」駅下車 昭和館前

●申込締切：11月18日(木)必着

●定員：100名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)

●参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本隆(事業部会)

## お申込方法

\*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく！

◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局

\*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

\*いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。

\*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。

\*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

## 会員優待のお知らせ

### ●特別展

好評開催中！

### 「隅田川～江戸が愛した風景～」

会期 2010年9月22日(水)～11月14日(日)

休館日：毎週月曜日

会員：一般 550円、65歳以上 270円、大・専門生440円

同伴者：一般 880円、65歳以上 440円、大・専門生700円

\*小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ

### 次回予告

### ●特別展

### 安部朱美創作人形展 「昭和の家族」きずな

会期 2010年11月20日(土)～12月17日(金)

休館日：毎週月曜日

会員：一般 500円、65歳以上 250円、大・専門生400円

同伴者：一般 800円、65歳以上 400円、大・専門生640円

\*小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ。

※本展の「友の会特別観覧会」は行いません。

※友の会会員の皆さんには1人1枚専用招待券を同封いたします。

### 予告

### ●特別展

### 「江～姫たちの戦国～」

会期 2011年1月2日(日)～2月20日(日)

休館日：毎週月曜日。ただし、1月3日(月)、1月10日(月・祝)、1月17日(月)は開館。

会員：一般 650円、65歳以上 320円、大・専門生520円

同伴者：一般 1040円、65歳以上 520円、大・専門生830円

\*小学生、中学生は無料。高校生は65歳以上と同じ。

### 企画展のご案内

### ●企画展

### 「徳川御三卿」

好評開催中！

会期 2010年10月5日(火)～11月14日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

### ●次回企画展

### 「林芙美子と東京放浪」

会期 2010年11月23日(火)～2011年1月10日(月)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

## 会報<えど友>第58号

平成22年11月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長) 副編集長：菅沼和男  
編集人：佐藤幸彦、岡田守弘、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、内匠屋京子、 笹川道央、秋尾暢宏、今野君江、中村貞子、原盛年、藤原理子、佐藤美代子

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910